

詩集・三光荘時代

高校を卒業した十八歳の春、僕は大阪に出てきた。東京とは比べるべくもないが、それでも愛媛県出身の僕にとって、大阪は大会だった。大阪では十年間近く暮らした。物ぐさな癖に、諸事情によって僕は引越しばかりしている。最初は大阪府堺市、次に大阪市の天王寺、寺田町、滋賀県の近江舞子、そして東京に移ってからは渋谷、駒場東大、恵比寿、目黒本町、やっと今の南麻布となる——まるで根無し草だ。

今年の十一月、僕が広報を務めている格闘技道場のドージョーチャクリキが、日本で初めてのクラブ・ファイトを堺市で開催することになった。ドージョーチャクリキは関西では堺市に関連道場が多く、三つもある。これも何かの縁だろうと思いい、大会終了後、久しぶりに古い友人を訪ねた。堺市の三国ヶ丘駅前で「デキシー・チキン」というライブハウス型のバーを経営している堀尾良太。彼とはもう二十年以上の付き合いになる。たまに電話で話すことはあっても、会うのは約六、七年ぶりだ。遅い時間だというのに、堀尾は僕を歓迎してくれた。ギターの上手な彼は、僕が音楽に夢中で一緒にバンドをやっていた頃のそのままの姿だった。

大阪の堺市で初めて独り暮らしをするようになって、僕は堀尾や小野木晋といった友人と「サテン・ドール」という名のロックバンドを組んだ。やがて堀尾は脱退するが、僕と小野木は新しいメンバーを加えて活動を続ける。ボーカルとギターを担当していた僕は、曲を書くようになり、オリジナル曲のレパートリーを増やしていった。サテン・ドールは、当時、堺市駅の近くにあった「J

UR I」というライブハウスを中心に、関西の色々なライブハウスなどで演奏した。JUR Iには様々なバンドが出演していた。「スローター・ハウス」というバンドのパフォーマンスは面白く、ポーカーは個性的だった。「ファニー・フェイス」というバンドはローリング・ストーンズが大好きなんだろうな、という感じが演奏からも伝わってきて、とても恰好良かった。ファニー・フェイスのボーカルであるシゲちゃんとは、ロック好きの集まるバーなどで度々出会すようになり、次第に仲良くなった。

数多くの若いバンドがそうであるように、数年間、関西を中心に活動したサテン・ドールも意見の対立などで解散する事になった。僕はシゲちゃん率いるファニー・フェイスにギターで加入した。この時期にはバンドの連中で一緒にローリング・ストーンズ初来日公演を見に東京へも行った。当然初日がお目当てだ。行きも帰りも僕たちは夜行列車に乗って、一晩中大騒ぎを続けていた。

ファニー・フェイスでは「曲を書きたい、歌いたい」という気持ちだが、ストレスとなって蓄積し、結局、僕は脱退した。それでもファニー・フェイスという恰好良いバンドが僕は好きだった。

独りぼっちになった僕を救ってくれたのが堀尾だった。彼と僕は「リトル・サテン・ドール」というアコースティックユニットを結成して、あちこちのライブハウスを自作の曲を歌って回った。それでもJUR Iの閉店や未熟さ故の人間関係のトラブルなどで、僕は徐々に音楽から疎遠になった。しかし、堀尾は自らライブハウスをオープンし、ロックンロールと不即不離の生活を確立した。そ

んな彼のこと、僕はいつも羨ましかった。

僕はアルバイトで始めたグラフィックデザインや編集の仕事が本業となり、東京に事務所を構えて独立した。いつも傍にギターはあるものの、バンドで音を合わせるなんて事は数年に一度となつてしまった。怠惰な僕は「忙しい」を言い訳にしていた。

今年の二月、再びDJョーチャクリキの主催大会があった。今度は千人近くを集めた少年空手大会。大阪府羽曳野市で開催された。いつもの店で大会の打ち上げが終わると、僕はデキシー・チキンを訪ねた。その夜は堀尾とシゲちゃんが居た。

若い時代、僕たちには色々な事があった。やたら一緒に居たこともあれば、険悪な仲になった事もあった。それでも僕たちはロックが好きだという、根っ子の部分で共感し合っていた。久しぶりに三人で会ったのだから——とシゲちゃんが「一緒に演ろう！」と声を掛けてきた。僕にも堀尾にも異存はない。堀尾は他の客を早く帰そうと企み出した。全くとんでもないマスターだ。僕たちだけになった店の中で、三人で延々とギターを弾き続けた。懐かしい曲ばかり演った。それは僕にとつてここ十数年で一番愉しい夜となった。

昔から捨てられなかったものがある。何度引つ越しを繰り返しても。それは自分の曲を書いた十数冊の大学ノート。それは僕の青春の記録そのものだった。

若い頃、僕は他者を否定し、ともすれば自己までも否定しかねない厄介な人間だった。歳を重ね、

僕はやっと他者を肯定し、自分の過去と向き合えるようになった。

シゲちゃんと堀尾と一緒にデキシ・チキンの夜は、ほんのちよつぱり人間的に成長した僕への、神様からの特別なプレゼントだったのでないかと、今も思っている。

やっとの事で僕は、ずっと持ち続けていた大学ノートを開くことが出来るようになった。随分遠回りをした末に、やっと過去の自分の姿を肯定できる気持ちになった。

本作は、そんな僕の若い時に書いた詩のいくつかを集めたもの。大阪府堺市の六条通りにある「三光荘」という古いアパートに住みながら、汗だくであったり、寒さに震えたりしながら、一生懸命に書き綴った、僕の「三光荘時代」の愛すべき作品たちだ。

目次

ボーイ・フレンド	8
会いたい	10
君のためのR&Rショー	12
雨でも降ればいいのに	14
マイ・リトル・ティーチャー	16
ペイン・マイ・ハート	18
夢から醒めて	20
ヘブン・オア・ヘル	22
ストリート・シンギング・マン	24
夜道	26
Go Go 大仙公園	28
クレイジー・フォー・ユー	30
ベッドの中で	32
街を眺めて	34
地下道	36
メロゼイ	38
Days of Love and Dreams	40
もしも君が僕の恋人だったら	42
マナー	44
どぶ川のほとりを	46
One Only Baby	48
リンゴをひとつ	50
もう少し優しくして欲しかった	52
あなたは僕の世界の全て	54
Midnight lost boy	56
独りにしないで	58
君は僕にとって大切な人	60

ボーイ・フレンド

難しいことを考えるのはやめた
昨日までのゴタゴタは全て忘れた
だからもう少し そばに居させて
もう少しだけ そばに居させて

一緒に笑ったり 一緒に泣いたり
ボーイ・フレンドのままに居させて
傷つけ合ったりするのはもう止めて
ボーイ・フレンドのままに居させて

何を焦って居たんだろう
ずいぶん嫌な奴になっていた
初めて君を見た時のように
初めて君を知った頃のように

一緒にはしゃいだり 馬鹿騒ぎをしたり
ボーイ・フレンドのままに居させて
痛くない腹を探るのはもう止めて
ボーイ・フレンドのままに居させて

会いたい

会いたくない奴にはよく会うのに
会いたい奴には会えません
「転びそうになりながら歩いてる

会いたくない奴には本当よく会う
あの娘にはちつとも会えないのに
あの娘は何処に居るのやら

西から東へ駆けずり回り
知らない街をうろつき歩く
息を切らして長い坂の上

会いたい奴はいつも遠くで
会いたくない奴が近くに居るものさ

あの娘は何処に行ったやら

ここからすぐに逃げ出したいのさ
まとまった金を手にしたならば
酔い潰れては いつもの夢の底

会いたいのさ あの娘にとても
会いたくない奴が多すぎる
「転びそうになりながら歩いてる
今日もこの街で歩いてる
夕暮れ帰り道 急いでる

君のためのR&Rシヨ―

小娘どもが騒ぎ始めたら
そろそろ俺の出番だぜ
安物のギターを掻き鳴らすよ

ポケットボトル飲み干したら
いつものブル―ズを
今夜この店に歓声上がる

君のための 君のための
君のための

R&Rシヨ― トウナイト

ガキだった頃の素直な気持ち
時間と立場に殺された気持ち

そいつを今夜 甦らせよう

君のための 君のための
君のための

R&Rシヨ― トウナイト

雨でも降ればいいのに

嘘泣きなんかする位なら もっと上手く騙して
悪い冗談なんだろ 顔を上げておくれよ

雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに
窓の外 眺めて

嘘泣きなんか見せるために わざわざここまで呼び出して
いったい君は何なの いったい僕は何なの

雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに

窓の外 眺めて

泣き続けてもしようがない 騙し続ければ良かったんだ
そしてこれからこの僕に 何をさせるつもりなの

雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに
雨でも降ればいいのに
窓の外 眺めて

嘘泣きなんかする位なら 上手く騙して欲しかった
背中丸めて帰り道 雨でも降ればいいのに

マイ・リトル・ティーチャー

張り裂けそうに胸は高鳴り
抑え切れない気持ちなんだ

みんな君のせいさ 僕を子供にする
好きだった先生の前みたく だだをこねてみようか
きつと 君はそれでも笑って
そつと 僕に触れてくる
You're my little teacher

学校の先生は教えてくれず
君は一日で教えてくれた

僕が変わるよ どんどん変わるよ
つまらなそうな顔する癖 忘れちゃったみたいさ

もつと 教えておくれよ
ずつと 一緒に暮らそう
You're my little teacher

どんな魔法を掛けられたんだろう
こんな素直な気持ちになれた

君さえそこに居れば 素敵な街さ
君に教えられた通りに 街中が動き出した
もつと 教えておくれよ
ずつと 一緒に暮らそう
もつと カッコ良く生きよう
You're my little teacher

ペイン・マイ・ハート

優しくした事なんて
憶えちゃ居ないんだろう
優しくされた方は
いつだって待ってたのに

あんななんて明日になれば
他のことに夢中になってる

I know 'used to be'

俺に触れないでおくれ 痛くなる

Pain in my heart

ジャックナイフ突き刺すみたいに

くたびれたような顔して
文句ばかりなんだろう

聞かされている方は
飽き飽きしてるのに

何かに飢えてる野良犬たちは
からかい易い生き物なんだろ

I know 'used to be'

俺に触れないでおくれ 痛くなる

Pain in my heart

ジャックナイフ突き刺すみたいに

夢から醒めて

夢から醒めて 悲しくて
煙草のけむりを 眺めてた

夢から醒めて 悲しくて
お前の名前を 呼んでみた

青い空を舞う天使たちは
もう俺には微笑まない Feel so sad

吐き気がする こんな午後に独りぼっちだ
一文無し こんな夜に独りぼっちだ

夢から醒めて 悲しくて
誰かの名前を 呼んでみた

青い空を舞う天使たちが
もう見えなくなってきた Feel so sad

吐き気がする こんな午後に独りぼっちだ
一文無し こんな夜に独りぼっちだ

ヘブン・オア・ヘル

夜が来れば あんたを想い
切ない気持ち 抱きしめてるのさ
ビロードのような瞳も
シルクのような脚も
全てを俺のものにしたいのさ

おいらの気持ちを知ってる癖に
思わせぶりの態度や電話
チャイルドフェイスの笑顔にも
甘い声の囁きにも
あんたの本当の気持ちが読めない

あんたの夢ばかり見る
天国と地獄を 行ったり来たりさ

変わり映えひとつない毎日
あんただけがおいらの救い
道化者にはうんざりだから
もっといい役与えてくれよ

駆け引きだらけのゲームさ
あんたが切り札持ってる
おいらに全部賭けてくれ

あんたの夢ばかり見る
天国と地獄を 行ったり来たりさ
It's just heaven or hell
You make me upside down

ストリート・シンギング・マン

Give me some money for drink, if so, I'll sing for you all night long.
Give me some money for drink, if so, I'll play for you till morning.

もつと もつと もつと酔わせてくれないか
出来ればあなたの金で

もう もう これいほいさも持っていないんだ
何処へ行くかも決めてねえ

遠い 遠い目をした あの娘の為に
何かを捜してる 旅人たちの為に

'Cause I'm just a street singing man.

Give me some money for drink, if so, I'll sing for you all night long.
Give me some money for drink, if so, I'll play for you till morning.

もつと もつと もつと酔わせてくれないか
出来ればあなたの金で

やっつと やっつと やっつと今ごろになって
ブルーズが聞こえてきた気がする

遠い 遠い目をした あの娘の為に
死ぬほど退屈している この国の為に
'Cause I'm just a street singing man.

夜道

暗い夜道を歩いてた
光は何処にも見えなかった
それでも夜道は続いてた
冷たく静かに横たわってた

歩き続けようか
座り込んでしまおうか 考えた

答が出ないままに 立ちすくんで居たさ
お前の名前を 呼んでみたけど

誰かさんの歌ならこんな時
暗闇の向こうから声がするんだろう
わざとらしい声の方へ行くと

そこには光が満ちてたりするのさ

だけどおいら何も聞こえない
お前の声が聞こえない

怯えたガキのように お前探してる
居るはずのないお前 探してる

いつまでも暗い夜道は続く
お前の顔が思い出せない
声を限りに叫んでみても
知らん顔の夜はそこにある

何をすべきなのか 考えつかない
暗い夜道と 真っ白な頭さ

Go Go 大仙公園

何て素敵な朝なんだろう
君を迎えにチャリンコ飛ばすぜ
大仙公園へ だいせん 大仙公園へ
ピクニックに行こうよ

Go Go 大仙公園

Go Go 大仙公園

寝惚けまなこで不機嫌な君も
きつとすぐに気が変わるさ
とてもいい天気さ お弁当作ってよ
ピクニックに行こうよ

Go Go 大仙公園

Go Go 大仙公園

チャリンコ二人乗りで行こう
緑の芝生でビールでも飲もう
とてもいい天気さ 早くおいでよ
ピクニックに行こうよ

Go Go 大仙公園

Go Go 大仙公園

クレイジー・フォー・ユー

ああそうさ 思い出したよ
この道 二人で 歩いたんだね
三年前の 秋の日のことさ
君が初めて僕の部屋に来た夜さ

兎の子を 飼い出したんだね
君の素敵な 思いつきのせいで
子供代わり あっちこっちに連れて歩いた

君にいかれてたよ
いかれた君にさ
君にいかれてたよ

I was crazy for you

最後の夜 憶えてるかい
君は一晚中 泣いてばかりで
港 丘の上 歩道橋の近く
僕らは 僕らのお墓を作った

君にいかれてたよ
いかれた君にさ
君にいかれてたよ

I was crazy for you

ベッドの中で

こんなに寒い朝は　ベッドの中で過ごそう
誰も来やしないから　裸のまま抱き合つて

猫みたいに　猫みたいに
布団の中で丸まつて
君はまだまだ眠そう

僕らの部屋の窓の下　小学生の笑い声さ
君は一度　伸びをして　そしてすぐに丸くなる

猫みたいに　猫みたいに
こんなに平和な朝
ベッドの中で過ごそう

こんなに寒い朝は　ベッドの中で過ごそう
お日さまに照らされた君のうぶ毛が　とても柔らかいのさ

猫みたいに　猫みたいに
こんなに平和な朝
ベッドの中で過ごそう
こんなに平和な朝
ベッドの中で過ごそう

街を眺めて

誰もが口々に自由を叫ぶ
その一方で縛り合いたがる
仕事 家庭 妻や恋人
やがてそれを 生き甲斐と思ひ込む

何の為に生きているのか
何の為に生かされてるのか
地位や名誉 金や評判
魂はそれで救われたか
そんなもんは全部まやかしだ

生きているのか 生かされてるのか
生きているのか もう殺されたのか
それとも俺の頭が おかしいだけなのか

誰もが自分の行く先を知らない
腰を下ろす場所さえ見つかからない
法や道徳 偽善 信仰
魂はそれで救われたか
そんなもんは全部まやかしだ

生きているのか 生かされてるのか
生きているのか もう殺されたのか
それとも俺の頭が おかしいだけなのか

地下道

ゲロ臭い地下道ちかどうを

俺は毎日歩いてる

すえた臭いに胸を悪くしながら

昨日誰かが駅のホーム

堪こちえ切れずにやっただらう

後の事なんて考えもしないで

流されたゲロは何処へ行く

下へ下へと流れてく

そしてこの地下道に また

すえた臭いがたちこめる

だけど明日もここを歩かなきゃ

だけど明日もここを歩かなきゃ

地下道を

地下道を

文句たれる前に考えた

何とかならないかと考えた

息を止めたら おいらちよつと咽むせた

だけど明日もここを歩かなきゃ

だけど明日もここを歩かなきゃ

地下道を

地下道を

上の方に居る人よ 驕り高ぶる人たちよ

どうぞ飲み込めないものを吐き出さなくてくれ

どうぞ飲み込めないものを吐き出さなくてくれ

メロディ

街のど真ん中の 作り物の公園でも

木漏れ日や ひだまりに なぜか優しさ感じて

生きていて良かったな 生きていて良かったな

ベンチに腰を下ろせば 聞こえてくるよ不思議なメロディ

母に手を引かれた子供が 不思議なダンスを踊り出す

生きていて良かったな 生きていて良かったな

何かいいことありそうさ それを見付けに行こう

ララララ ララララ 歌うよ

ララララ ララララ 歌ってよ

メロディ全部憶えたら 足どりも軽く歩き出す

大通りの人たちが 皆 昔っからの友達みたいさ

生きていて良かったな 生きていて良かったな

さあパレードを始めよう 行き先は後で決めよう

ララララ ララララ 歌うよ

ララララ ララララ 歌ってよ

春の日 並木道 二人は出会った いつしか二人は愛し合い始めてた
愛はもどかしく 愛はもどかしく
不慣れな言葉で大切な約束をした

古ぼけたポストンバックに全てを詰め込んで カビ臭いアパート 二人の暮らしが始まった
愛は切なくて 愛は切なくて
青い風の中 不安なんて何にもなかった

安物のギターに全てを託して 男は夢を歌い 女はただじっと見守った
強く抱きしめて 強く抱きしめて
すり切れた生活も ちっとも辛くなつてなかった

何度目かのチャンスを逃した頃から 男は酒に溺れだした 悪い噂がつきまとう
暗い部屋の中 暗い部屋の中

女はいつまでも男を待ち続けてた

夢は終わった あまりにも呆気なく 焦りすぎた男は ヤバイ仕事に手を出した
許しておくれよ 許しておくれよ
真夜中 アスファルトの上 最後にそう呟いてた

サイレン 駆け付けた 女の腕の中 薄汚れた身体だけが冷たくなってゆく
涙が止まらない 涙が止まらない
この町に初めての 雪が降り出してた

雪が降り出してた

もしも君が僕の恋人だったら

好きでたまらない

君のことを想う

気持ちは止まらない

眠れない夜が明けても

もしも君が僕の恋人だったら

もしも君が僕の恋人だったら

だけど届かない

二人はまだ友達同士

どうして気付かない 僕の気持ち

居ても立っても居られない

もしも君が僕の恋人だったら

もしも君が僕の恋人だったら

君に伝えたい

僕の本当の胸の内

なのに口ごもる

話すのはただ どうでもいいことばかり

もしも君が僕の恋人だったら

もしも君が僕の恋人だったら

お金が無いのは悲しいことです

あの娘と何処へも行けません

あの娘と あの暑い部屋で 汗だくになる事しか出来ません

お金が無いのは悲しいことです

あの娘に何も買ってやれません

あの娘と あの寒い部屋で 温め合う事しか出来ません

あんなに一生懸命

あんなに働いたのに

お金はあつという間に

消えてしまいます

お金が無いのは悲しいことです

あの娘と何処へも行けません

お金で愛は買えないけれど お金が無くちや愛は続きません

あんなに一生懸命

あんなに働いたのに

お金はあつという間に

消えてしまいます

お金が無いのは悲しいことです

あの娘に何も買ってやれません

今日もその日の生活に 追われる毎日です

どぶ川のほとりを

もうぶらぶらしてるのは飽きたから
誰か僕に首輪を着けてください
もう自分で探し回るのは飽きたから
誰か僕にいつでも与えてください

こんなに弱気に

こんなに弱気になってる 僕だから

君に受けた酷い仕打ちは

今も僕の心を傷つけたままなのさ

滲んで笑うお月様

微笑むんじゃなく 馬鹿にしている

歩いたんだ どぶ川のほとりを

歩いたんだ ひどく泣きながら

どぶ川の臭い忘れられない

鼻の奥にくっついたままなのさ

滲んで笑うお月様

微笑むんじゃなく 馬鹿にしている

うつむいたままで どぶ川のほとりを

歩いたんだ ひどく泣きながら

One Only Baby

お前さえ居れば 何も恐くない
お前さえ居れば 何も欲しくない

そうさ Baby 何でも出来るさ
そんな気分にさせられる

お前が居なくちゃ 何もしたくない
お前が居なくちゃ 駄目になりそうさ

そうさ Baby 俺の全てを
お前は手にしてる

ここに居ておくれよ このまま
Kiss しておくれよ そのまま

もう二度と俺を 迷子にしないでくれ

You're one only baby I love you.
You're one only baby I need you.
You're one only baby I hold you.

もう二度と俺を 迷子にしないでくれ

リンゴをひとつ

リンゴをひとつ

買う代わりに

僕は果汁100%の

缶ジュースを買おうとしました

でも 何か味気ない……

缶をどこかに

捨てる代わりに

僕はリンゴをひとつ

買ったのでした

もう少し優しくして欲しかった

僕らはもう戻れないんだね 君の目を見てたら悲しくなってきた
お互い承知の思い出話 途切れそうな言葉 無理矢理に繋いで

君は態度を崩さなかった 君は態度を崩さなかった
壊れそうな心を 必死で支えているように見えて

もう少し優しくして欲しかった
もう少し優しくしてあげたかった

今が充実してるなんて 君が言うから 僕も嘘を付いた
過ぎた事だと確認し合い 笑って話せるなんて強がって

僕はさよならが言えなかった 僕はさよならが言えなかった
あの時と同じように 気まずい沈黙がそこにあった

もう少し優しくして欲しかった
もう少し優しくしてあげたかった

別れ際に君は言うんだ あの子猫は今でも元気か と
あの頃のままの僕の部屋に 見に来ないか と言えば良かった

君は後ろを振り向かなかった 君は後ろを振り向かなかった
僕はただ突っ立って 小さくなってく君を見てた

もう少し優しくして欲しかった
もう少し優しくしてあげたかった

あなたは僕の世界の全て

あなたは美しい 光り輝くほどに

そんなに大切な時間を 僕にくれたんだね

あなたに この僕は 何を返せるだろうか

例えば金とか宝石とか そんなくだらない物じゃなく

あなたが笑えば そっだけ日が射したような

あなたの声は 優しいそよ風のような

そうだよ 今 あなたは 僕の世界の全て

そうだよ 今 あなたは 僕の世界の全て

あなたの居ない夜 二、三日の事でも

とてもまともじゃ居られない また空騒ぎが続く

ニワトリが朝を待つように ずっとあなたを待ってる

あなたから あなたから 全てが始まる

そうだよ 今 あなたは 僕の世界の全て

そうだよ 今 あなたは 僕の世界の全て

Midnight lost boy

ご機嫌な夜に浮かれて 今夜も Yeah Yeah Yeah
あの娘に出鼻くじかれて おいらも Down Down Down
Sometime I feel so happy, Sometime I feel so blue.
だけご おいらにゃあんたが必要

Woo Baby 嘘に聞こえても

Woo Baby お前が全てご

だけご空回りの夜

そっぽ向いたあの娘

置き去りにされた間抜けなおいらは

Midnight lost boy

安物の酒をしこたま喰らって Yeah Yeah Yeah
気が付きゃあの娘は Far away おいらも Down Down Down

Sometime I feel so happy, Sometime I feel so blue.
だけご おいらにゃあんたが必要

Woo Baby 嘘に聞こえても

Woo Baby お前が全てご

だけご空回りの夜

泣き出したあの娘

うろたえてる間抜けなおいらは

Midnight lost boy

独りにしないで

大騒ぎの後の最終電車が
いつもの駅で僕を吐き出す
立ち止まった僕に 人混みが流れてく
まるで僕の事 置いてくみたい

寂しかったから 馬鹿ばかりやってた
切なかったから みんなに笑われたかった

だから僕の事 独りにしないで

みんなで撮った写真に
とても大切だった女性ひとが写ってる
憶えていてくれるだろうか
僕の事なんて

照れ臭かったから 馬鹿ばかりやってた
口下手だったから あの娘に笑われたかった

だから僕の事 独りにしないで

酔いに任せて 馬鹿ばかりやってた
独りが嫌いだから みんなに笑われたかった

だから僕の事 独りにしないで

君は僕にとって大切な人

連れはすぐに出来るけど

友達を作るのは難しい

連れとは損得だけで動く奴

寂しそうな顔してると

その隙間に上がり込んで

お前のために

なんて言いやがる

連れなんて一人も要らない

それは多分鬱陶しいだけ

たった一人友達が居れば

ありがとう

ありがとう

君は僕にとって大切な人

昔のようにしょっちゅう

会ったりなんて出来ないけれど

いつも君のことだけは

気に掛けてる

連れなんて一人も要らない

それは多分鬱陶しいだけ

たった一人友達が居れば

ありがとう

ありがとう

君は僕にとって大切な人

ロックバンドで演奏することを前提に作ったこれらの詩には、当然ながら全てメロディが付いている。若い頃、何十回も歌った曲でも、こうして活字にすると、また違った印象を受けるから不思議なものだ。

大阪で掛け替えない旧友たちと楽しい夜を過ごしてから、僕は昔の自分とも向き合えるようになった。先日、『氷雨』のヒット曲で知られる演歌歌手、佳山明生さん主催のパーティに招かれた。ベテラン歌手の方々や、友人である芸人の春一番さん、力道山夫人の田中敬子さんなど、華やかな顔ぶれのパーティだった。佳山さんの歌が終わると歓談となったが、カラオケもあったので、「あまちゃん、歌うかい？」と、お調子乗りの僕の性格を良く知っている佳山さんは、声を掛けてくれた。酔いも手伝って、見事に調子に乗っていた僕は、カラオケではなくギターを借りて、自作の曲を歌った。プロの歌手の方々を前にして、今思い返すと恥ずかしいばかりだが、生来が厚顔無恥なもので、ノリノリで歌ったように思う。これもきつと旧友たちとの夜が無ければ、出来なかったことだろう。ましてや、今まで埃を被っていた数十冊の大学ノートを引っ張り出して、思い入れのある詩をまとめるなど、半年前には考えも付かなかったことだ。

拙作ながら、僕にとっては人生の中で大きな意味を持つ「詩」である。今では明瞭にそう感じる。これらの詩を読んで、何か感じてくれたら、それほど嬉しい事はない。何だったらギターを弾いて歌いましょうか、とまで言ってしまうそうだ。昔、ライブハウスで演奏をし、拍手と歓声を貰っ

た時と相通じるものがある。本作は僕にとっては特別な物だ。

お読み頂き、感謝いたします。

二〇〇九年四月四日
甘井もとゆき